



## ～戮力協心～ NO.2

2023年8月11日

発行責任者 池尻 和寛

編集責任者 情 宣 部

8月6日午前8時15分



広島

## 78年目の平和宣言



長崎

8月9日午前11時2分

「限界点一。そう呼ばれた場所で列車を止めると、われ先にと負傷者が乗り込んできた。やけどの水ぶくれで皮膚が垂れ下がった人たち。(中略)あつという間に満員となり『次の便に』と頼んでも、次々にドアの手すりにしがみついていた。」(2017.8.8 西日本新聞)

原爆が落とされた長崎市内からけが人を運ぶ「救援列車」の車掌を務めた瓦田一生さんの証言。当時22歳の国鉄職員は、長崎駅近くにあった車掌詰所で被爆、自身もけがを負いつつ乗務した。

被爆から78年をむかえた広島・長崎両市では、それぞれ8月6日と8月9日、平和祈念式典が執り行なわれました。

式典では、それぞれの市長が「平和宣言」を読み上げ、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現にむけて、力を尽くすことが宣言されました。両者とも共通して、今年5月に行なわれたG7広島サミットに触れ、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が成果文書としてまとめられたことを評価する一方、**その中身は「核兵器を持つことによる抑止」が前提**となっており、それでは核兵器廃絶の実現は成し得ないことを強調しました。



「核による威嚇を行なう為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の為政者は、**核抑止論は破綻しているということ**を直視し、(中略)具体的な取り組みを早急に始める必要がある。」 松井広島市長



「核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。**今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気をもって決断すべき**です。」 鈴木長崎市長

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。**忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。**」(被爆者・谷口稜暉談、長崎平和宣言より)

被爆者の語る被爆体験が、核兵器の非人道性を世界に訴え、それにより核兵器を78年間使わせなかった「抑止力」となりました。しかし、今年被爆者の平均年齢は85歳を超え、被爆者のいない時代をむかえようとしています。

ロシアの核による威嚇、北朝鮮の核開発が進み、核兵器をめぐる安全保障が厳しくなりつつある現在、私たちが核兵器廃絶の実現にむけてできることは、**被爆の実相現実を学び、単なる記録ではなく、苦しみや悲しみも含めた“記憶”として残すこと**です。

**私たちが安心して暮らせる平和な社会に核兵器はいらない！  
平和の取り組みを通して個々の「抑止力」を生み出し、核兵器廃絶を訴えていこう！！**